

# お早う

## 映画文学人生論

監督：小津安二郎 (1959年)  
脚本：野田高梧 小津安二郎 音楽：黛敏郎  
出演：林啓太郎 笠智衆 撮影：厚田雄春  
林民子 三宅邦子  
有田節子 久我美子 福井平一郎 佐田啓二  
富沢汎 東野英治郎 押売の男 殿山泰司

停年……停年ですよ。いやなもんですぞ

『青べか物語』で蒸気河岸の先生は芳爺さんからぼろ舟を買わされるが、川島雄三監督の映画では、このずる賢い爺さんは水戸黄門のような顔をしている。黄門様に強要されたのでは蒸気河岸の先生もぼろ舟を断りきれない。

芳爺さんの東野英次郎は、山田洋次監督『続・男はつらいよ』では寅さんの中学時代の恩師散歩先生、小津安二郎監督『秋刀魚の味』では平山周吉（笠智衆）の恩師たぬきを演じている。渋い芸で観客を幻惑する俳優だが、私の脳裏に強い印象を焼きつけ、無意識のうちに大きな影響を与えたのは小津安二郎監督『お早う』の富沢さんだ。

この映画の封切は昭和三十四年。タイトルも監督の名前も記憶がなく、内容もほとんど忘れていたが、学生だった当時の私も観ていることを今回DVDで富沢さんのセリフから思いだした。それは初老のサラリーマンの富沢さんが飲み屋で笠智衆に向かってぼやくセリフである。「停年……停年ですよ。いやなもんですぞ。……探しに行けど口はなし。どこまで続くぬかるみぞ。はかないものですよ」。

今にして思えば、このセリフがまだ学生のうちに予防注射として私の潜在意識に注ぎこまれたようだ。おかげで私はサラリーマンになる前から停年を迎える心の準備をしたことになる。よかったのか、悪かったのかはなんともいえない。



# お早う

映画文学人生論

東野英次郎はやはり小津安二郎監督の『早春』でも飲み屋で若いサラリーマンの杉山（池部良）を相手に同じようなグチをこぼしているし、『秋刀魚の味』の元漢文教師たぬきは退職後ラーメン屋のおやじになり、娘（杉村春子）の婚期が遅れてしまったと嘆いている。

東野英次郎が俳優としての本領を發揮する役柄は、富沢さんのような停年まぎわのしがたないサラリーマンではないかと思う。それとも、三つ葉葵の紋所が描かれた印籠を見せて「控えおろう。この紋所が目に入らぬか」と大見得をきる水戸黄門なのだろうか、いずれにしても、それらしく見せて観客を幻惑する芸は見事なものだ。

『お早う』はテレビや洗濯機など電化製品が普及しはじめた頃の庶民の暮らしを描いた映画。お互いに悪口を言い合う主婦たちの表情や人相の悪い押売り（殿山泰司）の手口、飲み屋でこぼすサラリーマンのグチなどの場面を今頃観ると意外と面白く、なつかしいような気分さえなる。

小津安二郎監督作品で当事私が観た映画は『早春』と『お早う』だけ、しかも監督の名前も記憶に残らなかった。その頃の小津安二郎は、黒澤明や木下恵介ほど有名な監督ではなかったと思う。

しかし、私の潜在意識に沈みこんだ影響から判断して、『お早う』は非凡な映画かもしれない。

意味不明挨拶かわし初笑い